

一 次の問いに答えなさい。

問一 次のの——線部をそれぞれ漢字に直しなさい。

- 1 梅雨時は食べ物がイタむのが早い。
- 2 親にコウコウする。
- 3 祖父は自伝をアラワした。
- 4 フンパツして高い万年筆を買う。
- 5 会社の方針にイギを唱える。
- 6 絶対的なエースとしてチームにクンリンする。

問二 次の漢字に共通する部首を加えると、それぞれ漢字がで

きあがります。その部首名をひらがなで答えなさい。

(例) 化・古・右・何：くさかんむり(花・苦・若・荷)

- 1 朝・夜・主・去
- 2 才・加・次・代
- 3 兄・申・土・見

問三 次のの——線部を指示に従って適切な敬語表現に言い換

え、解答欄に合うようにそれぞれひらがなで答えなさい。

- 1 先生に御礼を言う。(謙譲語に言い換えなさい。)
- 2 社長が昼食を食べる。(尊敬語に言い換えなさい。)
- 3 恩師から手紙をもらう。(謙譲語に言い換えなさい。)

問四 次の□の中の漢字を使い、1〜3でそれぞれ四字熟語

を一つずつ完成させて答えなさい。なお、□内の漢字は二度用いてもよい。

- | | |
|---|--------|
| 1 | 快後生重起 |
| | 断前絶頭両意 |
| | 死味一空深 |

- | | |
|---|--------|
| 2 | 少刀大以機 |
| | 一直発心異短 |
| | 意伝入同危 |

- | | |
|---|--------|
| 3 | 命心対一果 |
| | 絶中無転画自 |
| | 報氣因夢応 |

問五 次の語句を国語辞典に登場する順番に並べ替えて記号で

答えなさい。

- ア 大きさ イ オーケー ウ オーケストラ
- エ 王家

食べものについて考えるには、まず「食べものは生きものである」ことを知らなければいけない。そんなのあたり前、ときみはいうかもしれない。でも、そのあたり前のことをあらためて考えてみてほしい。ぼくたちは毎日、生きものを食べることによって生きている！生きもののいのちをいただくことによつて自分のいのちを育てたり、保つたり、守つたりしている！ぼくたちが「おいしい！」というときの「おいしさ」は、「いのちのおいしさ」だったんだ。

「食べものは生きものである」。だからこそ、素材の新鮮な食べものはおいしい、とみんないう。微生物の働きによつて、時間をかけてつくられる発酵食品はおいしい。旬の食べものはうまい、とみんな思う。有機無農薬の野菜はおいしい。科学的に合成してつくった肥料や農薬を使わないで、自然界のいのちの力だけで育つ野菜だから。

生きものが生き生きと生きるには、いい水といい空気といった土と太陽のエネルギーと多様な生物のコミュニティが必要だ。つまり、おいしいものは豊かな自然環境からやってくる。だからおいしいものを食べたかったら、その環境の豊かさを守らなければならぬ。

もうひとつ。ファストフード（そのまま訳すと「速い食べもの」）の流行に代表されるような最近の食生活の大変化は、世界中で環境破壊と健康被害の大きな原因になっている。それは逆にいえば、食生活をよくすることが自分の健康のためにもなり、環境破壊を食い止めることにもなるということだ。おいしく安全な有機無農薬の食品を選び、なるべく国産の、できれば自分の住んでいる地域でとれた旬の新鮮な食材を、長い伝統に育まれた調理法でおいしくいただく。それがきみの健康

のためにも、地球環境のためにもいい。これって、おいしい話じゃない？

B、きみはスローフードということばを聞いたことがあるんじゃないかな？①ファストフードの流行のかげで失われそうなおいしい食べものを守れ、という、北部イタリアの小さな村に住むとびきり食いしん坊のおじさんたちがはじめた運動のことだ。今では世界中に広まって八万人がこの運動に参加するほどになっている。

それにしてもスローフードとは変なことばだときみは思うかもしれないね。「ゆつくりな食べもの」だなんて。でもその疑問もまた「食べものは生きものである」ということからゆつくり考えていけば解けるはずだ。

生きものにはそれぞれの「生きもの時間」がある。どの生きものもそれぞれ独自の時間をそれぞれのペースで生きている。途中で他の生きものに食べられるものもあるし、死んでから栄養となつて他のいのちを育むものもある。個々の生きもの時間が鎖のように長く連なつて、種全体の時間をつくっている。

長い歴史の中で人間は、こうしたさまざまな種の生きもの時間に学び、そのペースにうまく自分たちの暮らしのペースを合わせるようにして生きてきたはずなのだ。欲ばつていっぺんにたくさんとつてしまえば、次の世代を産み、育ててゆく動植物のペースが追いつかなくなつて、結局、自分の食べものがなくなつて困ることになる。

C、自分が生きていくためには、急

がず、あせらず、相手の時間に合わせる必要があるのだ。農業や牧畜や養殖をする人たちは、ただ相手の生きものとの時間にこちらのくらしを合わせるだけでなく、②さらに一歩進めて、相手を自分のくらしのペースの中に引き入れることによつて食べものをもっと確実に手に入れようとする。イネやムギは、人間がつくった田んぼや畑で、野生の植物だったときとは

ちよつとちがう時間や空間の中に生きて、多くの実をみおらせ、人間が一年を通じて食べる主食となる。牛や豚やニワトリなどの動物は、人間のつくった農場や牧場で、これもまた野生の動物とはずいぶんちがうくらしぶり——自分で探さなくても餌が与えられる分、ずっとファスト——をしながらも、それぞれの動物に独特の時間を生きて、やがて人間の食べものとなる。今世界に生きている六十数億人が食べる食べものほとんどは、農業や牧畜や養殖によつて得られるものだ。大昔にはすべの人間がやっていた狩猟、採集、漁労——野生の動植物や天然の魚介類をとる活動——は、ほとんどなくなってゆく。それは、人間が入りこんできたために動植物の住んでいた場所が減つたからでもあり、また人間があまりにたくさん動植物をあまりにも速いペースでとつてきてしまったからでもある。では、人間の時間と動植物の時間が歩みよるようにしてできたはずの農業や牧畜や養殖の方はどうなっているのだろう。昔のお百姓さんたちに比べて、最近の第一次産業を仕事とする人々はほとんどせつちかちになつてきていて、③生きものたちが生きる時間のスローなペースがもう待ちきれなくなつてきているようなのだ。

第一部の第三章では、狭い場所にギュウギュウ詰めにしたニワトリや、ふつうより何倍も速く育つようにつくり直されたサケやレタスの話をしたね。それはみな、ぼくたち人間がいかに生きものたちの時間を大切にしていなかったか、を表しているだろう。いや、それどころではないのかもしれない。ぼくたちはもう、「食べものは生きものである」というあたり前のことさえ、忘れかけているのではないだろうか。

生きものとしての扱いを受けない生きものは不幸せにちがいない。それは、人間らしい扱いを受けない人間が不幸せなのと似ている。動物や植物に幸せも不幸せもない、と考える人もい

るだろうが、ぼくの考えはちがう。ぼくは昆虫学者のファーブルの、どんな生きものにも「生きるよろこび」があるという考えに賛成だ。

生きるよろこびを奪われた生きものたちの実や肉や卵がぼくたちの食卓にやってくる。不幸せな命をいただいて、果たしてぼくたちのいのちは幸せになれるのだろうか、とぼくは疑わずにはいられない。ぼくたちの「生きるよろこび」もまた、自分が食べものとしていただく生きものたちを生きものらしく扱えるかどうかにかかっている、という気がするんだ。

スローフードということばの意味について考えてきたことを、このへんでまとめよう。それは単にゆつくり食べようということじゃない。それも大事だけど、もっと重要なのは、「食べものは生きものである」ということを思い出すこと。**D**、その生きものまわりに流れるゆつくりとした時間を尊重すること。つまり、食べものを養殖し、栽培する人も、買う人も、食べる人も、みな「上手に待てる」ようになること。

食卓にはいろんな時間が混じりこんでいる。植物の成長に立ち会つて、そつと手をそえる農民たちの時間。彼らのくらしのリズム。食物が都会へと運ばれてくる時間。調理や盛りつけ時間。そんないろんな時間の積み重ねの上に、今、こうして家族や友人たちが食卓を囲んでおしゃべりしたり笑つたりしながら、ゆつくりとした時の流れを楽しんでいる。そう思うと、食卓ですごい場所だ。ぼくたちは本当にたくさんのおいのちのおかげで、こうして生きている。ありがたいことだ。そのありがたいこそが、食べもののおいしさの最大の秘密なのではないだろうか。

（辻信一 『ゆつくり』でいいんだよ』筑摩ブライマー新書）

二の設問

※字数制限のある問題については、記号、句読点も一字と数えます。

問一 文中の空欄 A 〱 D にあてはまる語句として

最も適切なものを次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。

- 1 そして 2 だから 3 さて
- 4 しかし 5 あるいは 6 なぜなら

問二 線部①「ファストフードの流行のおかげで失われそ

うなおいしい食べもの」とありますが、なぜ「ファストフード」が流行すると、おいしい食べものが失われるのですか。それを説明した次の文中の空欄にあてはまる語句を、それぞれ文中から抜き出して答えなさい。

ファストフードの流行などが I (五文字以内) をもたらし、それによって、II (十五字以内) おいしい食べ物が作られなくなってしまうから。

問三 線部②「さらに一歩進めて、相手を自分のくらし

のペースの中に引き入れる」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 イネやムギの収穫時期をずらし、魚を養殖し、牛や豚やニワトリを家畜とすることで、地球の環境破壊につながるのとわかりつつも、人間の身勝手な欲望のために生きものの生きるペースを狂わせること。
- 2 イネやムギを品種改良し、魚の繁殖時期をずらし、牛や豚やニワトリを食用に飼育するなど、生きものの本来の姿形を変えるだけでなく、その生きるペースをも人間の都合に合わせて変えること。
- 3 イネやムギを効率的に栽培し、食用の魚のみを養殖し、牛や豚やニワトリを食用のために家畜にするなど、生きものの本来の生き方を否定し、あくまで人間に合わせたペースで生きるように強要すること。
- 4 イネやムギを品種改良し、魚を大量に養殖し、牛や豚やニワトリを大量生産することで、生きものの本来のペースを人間のそれに合わせてずらし、人間が生きるための道具として生きものを存在させること。
- 5 イネやムギを効率的に栽培し、魚を養殖し、牛や豚やニワトリを家畜にするなど、人間の思い通りに食物を生産するために、本来の生きものの生きるペースを、人間の都合に合わせて変更させること。

問四 線部③「生きものたちが生きる時間のスローな

ペース」とありますが、これと同じ内容を具体的に表している部分をこれより前の文中から二〇字程度で抜き出して答えなさい。

問五 本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 科学的に合成された肥料や農薬を使わずに作った有機野菜は、植物としての野菜が持つそのままの時間を確保しながら、豊かな自然の中で大切に育てられている。
- 2 毎日の食事は動植物だけでなく、さまざまな人の手間や労力の積み重ねによって成り立っている貴重なものである。
- 3 ファストフードは、動物を自分で餌を探さなくて済むような安全で快適な環境で育てることで、食物を早く確実に生産できるような配慮がなされたものである。
- 4 世界中に広まったスローフードの流行は、おいしい食べ物を守るだけでなく、生きものの住む場所を確保し、絶滅を防ぐという幸せもたらす。
- 5 人間の食べものとして育てられ、生を終えた動植物は、生きものとしての扱いを受けることができず不幸せに違いないということを人間は忘れてはいけない。

問六 線部「ぼくたちが『おいしい!』というときの

『おいしい』は、『いのちのおいしさ』だったんだ」とありますが、本文では「いのちのおいしさ」についてどのように述べられていますか。八〇字以上一〇〇字以内で説明しなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

上田孝夫は幼い頃に母を亡くし、その後父が村を出たため、祖母に育てられている。以下はそれに続く場面である。

① 孝夫の小学生時代の思い出は狭い田と急斜面の畑と奥深い山での厳しい労働が核になっていく。合わせて一反に満たない棚田が六川の向こうとこちらに数枚ある。春になれば重い備中ぐわに振り回されながら田起こしをした。しろかきや田植え、稲刈りなどは近所の家々との共同作業になったが、田の草取り、水見など、小学生の孝夫に課せられた仕事は数え切れなかった。孝夫の小学生時代の生活は、生きるためにしがみつかねばならないA 零細な農業の一人前の担い手として肉体労働に明け暮れていただけだったのである。幸い、祖母は学校を休ませてまで孝夫をこき使うようなことはしない人だった。

きつい労働から解放される唯一の場所として、孝夫は学校が好きだった。小学校は六川集落から二キロばかり下った森平集落にあった。ここは谷中村の中では最も平地の面積が広く、戸数も百戸の上あり、役場、郵便局、診療所、雑貨屋などがそろった村の中心地だった。

孝夫は勉強のできる子だった。家では教科書など開いたことではなく、またそんな時間的余裕もなかったのだが、たまに行われているテストの成績は常に学年で一番だった。農作業のまたとない息抜き。孝夫にとって小学校の授業はそれ以上のものではなかった。畦塗りやしろかきの苦勞を忘れて理屈の中で遊ぶ。それが無性に楽しかった。ふだん祖母から、「理屈つこきの男ほどB 始末の悪いものはねえ。おめえの父ちゃんがそうだった」

と、聞かされ続けているものだから、孝夫は知らぬ間に寡黙な少年になっていった。

祖母や独り息子の自分を捨てた父のように死んでもなりたくなかったので、生来 X 好きであるのを意識しながら、家にあつては黙って物事を実行する男であろうとつとめていた孝夫であつた。

その頃、目立った産業のない谷中村の人々の生活はどの家も貧しかったが、中でも孝夫の家庭の貧困は群を抜いていた。正月元日の膳には鰯料理を並べるのがこの村の古くからの風習だが、鰯の買えない家は六川で採れたハヤを食べた。それすら購入できずに、正月から缶詰のサバの水煮を食していたのは、六川集落に限ったとしても、孝夫の家と② 阿弥陀堂守のおうめ婆さんくらいのものであった。

谷中村の七つの集落にはそれぞれに阿弥陀堂があり、堂守がいる。いずれの集落でも堂守は身寄りのない老婆の役目なのである。集落全体の仏壇である阿弥陀堂に住んで、村人の総代として毎日花や供物をあげ、堂の掃除をする。その対価として村人は米や味噌をとどけてやる。いつの時代から始まったのか分からないが、これは生活保護によく似た村の福祉制度なのである。昭和三十年代の半ば頃から少しずつ集落を出て行く人たちが目立ち始め、廃屋が増えていった。

ちょうどそんな時期、三年間連絡のなかった父から手紙が来た。東京郊外で鉄工所に勤め、いくら落ち着いたので、中学からは東京に出てこないか、と誘う内容であつた。父に会いたいとも、ましてや共に暮らしたいなどとは思ひもしなかったが、「東京」の二文字には抗し難い魅力があつた。夜、祖母が寝ついてからひそかに地図帳を開き、山で囲まれた茶色の谷中村と、鉄道路線で埋めつくされた緑色の東京を見比べていると、孝夫は次第に荒く乱れてくる呼吸をどう制御したらいいのか分からなくなった。

このまま村にいても、中学を出たら家を手伝い、貧乏なまま老いてゆくだけ。もしかしたら川上の文三さんみたいに嫁ももらえないかも知れない。

六川集落の一番上に住む文三さんは二人の兄が都会に働きに出てしまい、年老いた両親と田畑を耕していつしか五十歳になつてしまった。谷中小学校で一番の秀才だったそうだが、家

が貧しかったので上の学校には行けず、ずっと農作業に従事し続けてきた。路で文三さんとすれ違ふと必ず、勉強はちゃんとやれよ、と声を掛けられる孝夫であつたが、土ほこりにまみれ、陽に赤黒く焼け過ぎた貧相な禿げ頭を見ると、自分の将来の姿を見せつけられているようで、子供心にも暗然たる思いを抱いたものだった。

「東京に行きてえ。このまま村にいて文三さんみてえにはなりたくねえ」

父からの手紙が届いて三日目の夜、孝夫は考えあぐねた末の結論を囲炉裏端でひね小豆を拾う祖母にぶつけてみた。

「文三さんはそういうかわいそうな人でなあ、おめえは顔もしまつて男らしいし、嫁が来ねえなんてわけはねえぞ」

祖母は嘘っぽい涙を流しながら孝夫を説得した。

③ おめえはなあ、花見百姓になりそうぞ、おらあ心配してただが、やつぱり東京なんぞに行きたがるようになつちまったんだ」祖母は掌に拾い込んだ虫の喰ったひね小豆を囲炉裏に投げ入れた。

もう泣いてはいない彼女の怒りを表すかのように、囲炉裏の火が鋭くはぜた。

「花見百姓つてなんだ」

孝夫は初めて聞く言葉だった。

「花見百姓にやあ嫁に行くなつてな。昔っから村の女衆の間じゃそう言われてた。桜の花ばかり見てて田起こしもしねえような男はろくなもんじゃねえつうことだ」

祖母はザルの中の小豆に向かって悪態をついた。

「どうしておれが花見百姓なんだ」

祖母に逆らつたことはめつたになつた孝夫であつたが、④ 東京」が彼をそそのかしていた。

「おめえが一年生に上がつて間もねえとき、学校から帰つてきてなあ、桜の話ばかりしてたのを覚えてねえだか。窓から校庭の桜が散るのを見て、あんなきれいなもんは見ることがねえつてうるさくしゃべつてたろうが。ああ、よわつた。この子は花見百姓になつちまうんじゃねえかと案じていたら、やつぱりそうなつちまつた」

泣くのをやめた祖母の語りは開き直つた低い声になつていった。祖母は花見百姓の存在を頭から否定しているわけではなさそうだった。人は放つておくと花見百姓になつてしまうものだからくれぐれも注意しなくてはならない。それなのにおまへはやはりなつてしまったか、という老人らしい諦めの口調が多分に混じつていた。

「行つてもいいんかい」
孝夫は念を押してみた。
「おめえの好きにすりゃあいい」
ひね小豆を拾い終えたザルをゆすつてゴミを吹き飛ばしながら、祖母は目を閉じていた。

出発の朝、祖母は森平のバス停まで見送つてくれた。
「休みにやあ帰つて来るだぞ。おめえは腹が丈夫じゃねえから百草丸を忘れずに飲むだぞ」

祖母は別れぎわに曲がつた腰を伸ばしてそう叫んだ。
孝夫がバスに乗り込んで後ろの窓に顔をつけて見ると、⑤ 祖母は振り向くでも手を振るでもなく、トポトポと六川集落への道を登つていった。その姿があまりにも小さかつたので、孝夫はたまらなくせつなくなつた。

(南木佳士 『阿弥陀堂だより』 文春文庫)

注1 一反……土地の面積の単位。約十アール。

注2 しろかき……田植え前に、田に水を入れて土をかきならす作業。

注3 畦塗り……田から水が漏れるのを防ぐために畦を土で固めること。

注4 ひね……収穫後一年以上経つた穀物。

注5 そういう……本文より前で、文三さんは若い頃に木から落ちて大怪我をし、そのせいで嫁をもらえないと祖母は語つていた。

三の設問

※字数制限のある問題については、記号、句読点も一字と数えます。

問一 〰〰〰線部A・B・Cの本文中での意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

A 零細な

- 1 暮らしぶりが貧乏な
- 2 先行きが不安である
- 3 弱く消えてしまいうような
- 4 わずかな抛り所しか持たない
- 5 規模がきわめて小さい

B 始末の悪い

- 1 一緒にいると気詰まりで疲れる
- 2 心が曲がっていて性質が素直でない
- 3 対応に手間がかかって面倒である
- 4 やたらと反抗してきてどうしようもない
- 5 将来の見込みが無くやつかいである

C 暗然たる

- 1 何とも言えない憎しみがこみ上げた
- 2 悲しみや憂いで胸がいっぱいになった
- 3 辛い出来事により人間不信になった
- 4 悲観的になり心身共にやつれきった
- 5 未来に失望しきって自暴自棄になった

問二

線部①「孝夫」に関する説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 貧しい農家の生まれにもかかわらず孝夫の成績は常に上位だったが、田舎暮らしで口うるさく保守的な考えの祖母に気を遣って、家では勉強が出来ることを隠していた。
- 2 孝夫には勉強は辛いものでないばかりか、閉鎖的な我が家や日々課せられる肉体労働から解放される一種の娯楽のように感じられ、二キロほど離れた学校へと進んで授業を受けに通っていた。
- 3 小学生の孝夫は数え切れないほどの仕事を任されていたが、田舎よりも開けた村の中心地で思い切り羽を伸ばして遊ぶのが好きで、辛い農作業を課せられ続けることを嫌がっていた。
- 4 貧しい谷中村のなかでも群を抜いて貧しい家に生まれた孝夫は、生きていくためには何より働くことが大事だという考えの下で育てられてきたが、そういった祖母の考え方に内心では反発していた。

- 5 家では論理立てて祖母に見聞することも自由にできない孝夫にとっては、思う存分に理屈で遊べる学校の勉強は楽しく、学業を頑張れば田舎を出て行ける日が来るかもしれないと希望を抱いていた。

問三

文中の空欄 X にあてはまる語句として最も適切なものを本文中から漢字二字で抜き出して答えなさい。

問四

線部②「阿弥陀堂守」のシステムについて説明した次の文の空欄にあてはまる語句をそれぞれ文中から抜き出して答えなさい。

阿弥陀堂の運営を行う I (十字以内) を村人が養うという、 II (十五字以内)。

問五

線部③「おめえはなあ、花見百姓になりそうぞ、おらあ心配してただが、やっぱり東京なんぞに行きたがるようになっただ」とありますが、このとき、祖母は孝夫が将来どんな職業に就くと予感していますか。適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 漁師
- 2 カメラマン
- 3 評論家
- 4 画家
- 5 精神科医

問六

線部④「東京」が彼をそそのかしていた」とありますが、このときの孝夫の様子を説明したものと最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 希望していた東京行きを祖母に反対されたことで、故郷や自分たちを捨ててのうのと東京で暮らしている父への反感が湧き上がり、やりきれない思いを祖母にぶつけている。
- 2 東京に出られず一生を田舎で過ごす文三さんと自分を重ね、普段から不安な気持ちで過ごしていたため、反対する祖母の言葉にさへも、かえって東京に行きたい気持ちをかき立てられている。
- 3 口うるさい祖母の意見を日頃は聞き流しているが、今回ばかりは東京行きの願いを聞き入れてほしいと思いい、自分は祖母の心配するようなことにはならないと根気よく説得しようとしている。
- 4 東京はさびれた山奥の谷中村とは比べものにならないほど都会で、そこに行く機会を逃したくないという思いから、いつもは言い返せずにいる祖母の高圧的なもの言いにも強気になって反発している。
- 5 東京に行けば人生に希望が持てるように感じているため、祖母が非論理的な言いがかりをつけてくるのは田舎者だからだと思いい、祖母の意見を聞く耳を持たなくなっている。

問七

線部⑤「祖母は振り向くでも手を振るでもなく、トボトボと六川集落への道を登っていた」とありますが、この時の祖母の気持ちを六〇字以上八〇字以内で説明しなさい。

